

松村実践に学ぶ

実践に
学ぶ

家づくりを通して 子ども達の発達を保障する

長崎純心大学

日比野 正己

私は編集委員を長くしているが、新しい「実践に学ぶ」シリーズは面白い。いわば「一服のお茶」のような効果があり親しみやすい。

私の「実践に学ぶ」方法は、「学」の文字にある「子」のように学ぶことにしよう。

1 子ども主体のコンセプトが魅力的

「子ども達が自分たちの家を創る。そして、自分の弁当は自分で作る」というコンセプトは、松村が学園に初めに提案した「子ども達と共に創る学園」を具体化しており明快である。「自分」という言葉が3回も繰り返され、「創る」と「作る」を区別している。「自分の弁当」は外食とは違う家庭的で手作りの温かみが伝わる。

芸術でもある建築作品はコンセプトが大事であり、松村作品のレベルをすでに物語っている。

2 子ども達が主体的に参加・実践する徹底したプロセス

「家」を造るとき、職員とワークショップを開いたり、子ども達の要望をアンケートすることは、よくあるだろう。しかし、松村実践では、工事に伴う打ち合わせの「現場定例会議」にも子ども達が出席した。「施工計画書・工程表・質疑書等」も配付し、「専門用語や分かりにくい言葉」は知的障がいの子も達にも分かりやすく噛み砕いて説明している。

さらに「工事現場」に入ってもらい、子ども達の意見を反映させ、「内装」の検討など半年にわたる工事中、「自分たちの意見が形になり自分た

ちが選んだものが一つひとつ創られていくのを身近に」体験してもらった。

さらに玄関扉と中庭デッキの「陶板」づくりやレイアウト、自分の椅子づくりまで「子ども達が自分たちの家を創る」というコンセプトどおり完成まで子どもも主体で実践している。それは驚きであり見事である。

3 劇的ビフォーアフター

松村実践の原稿を初めて読んだとき目頭が熱くなり感動した。人気テレビ番組の「大改造!! 劇的ビフォーアフター」の誌上版ともいえ、「なんということでしょうか?!」の連続だった。

新しい「家」での様子は、表2の「新建設後の天草学園で暮らす子ども達」から読み取ることができる。たとえば次のようである。

A君(19歳)(虐待で入所)の場合、「食事」「洗濯」「掃除」など「生活を楽しむ」「積極的に行うことで自分たちが生活する『家』といった気持が強く芽生え、「情緒面と社会性」では「生活空間が増えたことにより、対人関係のトラブルが減少」「自ら外出するような積極性がでてきた」とある。

Bさん(高2)(育児放棄で入所・軽度の知的障がい)の場合、「作りたてのご飯が食べられるようになり、笑顔が増えてきた。調理や手作りおやつ時間を非常に楽しみにしており、その事に意欲的に参加する姿」「洗濯はすべて自分で行う」「情緒面や社会性は、自信がついたことで嫌な事はNOと言える」「個室での生活を楽しむ余裕が見られる」。

誌面の制約があるが、もし、ビフォーとアフターを写真と図面を活用して対比・対照すれば、松村実践の「劇的ビフォーアフター」をさらに効果的に的確に証明できただろう。

4 「家づくり」から「家庭づくり」「信頼づくり」

松村実践の「まとめ」は実践の真髓を披瀝しており、ひときわ私の心に響いた(下線は引用者)。

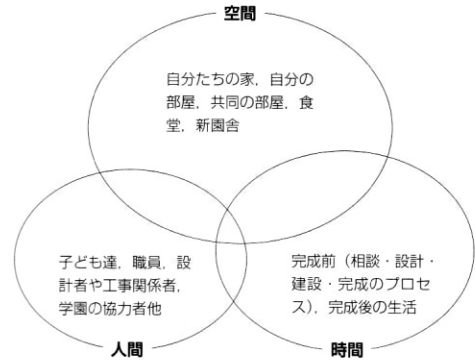
「一番信頼を寄せる親から裏切られた子ども達が、普通は経験しない『家を創る』という大きな事業に参加して、自分達が主人公であると自覚をするとともに、人を信頼する事の大切さを学んでほしいという願いをこめてこの事業を進めていった」「子ども達が落ち着き信頼を取り戻し、自分の良さを見つけ、自立に向かって夢や希望を持って生きていける切っ掛けになったのではないかと自負している」／「話し合いながら工夫と努力を重ね臨機応変に対応し、『あたりまえの生活』を保障する目標に向かって進んでいきたいと職員は語っている」／「カレーライスが熱い…」(カルチャーショック)。／「子ども達はひとりぼっちではない。多くの人達に抱きしめられている」／「天草学園は、頑張って生きてきた子ども達に、いついかなる時にも駆けこんでこられる扉が開いている」

「扉」に関して、「6 設計の基本方針」の始めに「建物の正面に在るエントランスの扉は、厳しい扱いを受けてきた子ども達を守るという強い意思表示である」とある。私の「バリア・フリー・デザイン」は「なんでもバリアフリーでなく逆にバリアをつくることでフリーにするデザイン」も含むが、松村の扉のデザインは子どもにとっていわば「防御」(父親)と「守護」(母親)を兼ね備えた「家庭」のシンボルともいえようか。なお、「家」はhouseであり建築物であるが、「家庭」はhomeであり「庭」(自然、季節)つきである。つまり松村実践は建築物である「家」と同時に「家庭」を具現した優れた実践といえよう。

松村実践は「家づくり」を通して「自分づくり」「自信づくり」など「発達保障」の実践そのものといえる。

5 人間・空間・時間という三間法^{さんまぼう}

松村実践を私の知的研究法(HM研究法)の一つである「三間法」¹⁾をもとに述べてみよう。三間法とは、「人間」「空間」「時間」という三つの間から総合的に研究・考察する方法である。松村実践を図解すれば、図のようになる。松村実践は



当然ながら「空間」が大きい、「時間」が際立っている。三間が連携しながら発展している。

6 御縁の連鎖

松村実践は櫻井康宏編集委員(福井大学名誉教授)から聴いており、松村は福井大学で課程博士論文を書いたという。

「子」のように学んだ後、いまやネット時代なので「松村正希」で検索すると、ホームページがあり、建築家松村を詳しく知ることができる。また『愛する人たちへ～日本初のグループホーム型特養の挑戦』(藤居眞と共著、中央法規出版、2002年)の著作がある。読むと「1948、京都府生まれ」とあり私と同年、しかも私は大学院修士課程を京都大学の西山卯三先生のもとで過ごしたので御縁がありそうだ。

天草学園のホームページを見ると、私が住む長崎市から近い。長崎県南島原市の口之津港から熊本県天草市の鬼池港へフェリーで行ける。天草学園のスタッフともどこかでお会いしたかもしれない。天草学園を見学すれば「松村実践に学ぶ」をさらに深めることができるだろう。

注

- 1) 日比野正己編(2003)研究のすすめ方、阪急コミュニケーションズ、第7章「HM法式研究法」で初めて披露した。本誌の「特集 福祉のまちづくりの新展開」(Vol.33, No.3, 2005年)の「特集にあたって」で紹介したが、「福祉のまちづくり」とは、「福祉」(人間の幸福)、「まち」(あるべき空間)、「づくり」(プロセス(時間))となる。